はじめに

定年退職を控えた者が、いざ本誌の「はじめに」を書くとなると、さまざまな思いが去来する。まず、私たちが院生の時代は、当時の教員との「カリ討（カリキュラムに関する話し合い）」での話題のひとつとして、必ず「講座の紀要をつくってほしい」という要求をあげたものである。その要求の背景には、院生の執筆機会が決定的に少なく、それでは厳しさを増す就職戦線では到底勝ち抜けないという院生側の焦りがあった。事実、他大学では教員の編集する講座本に院生たちが大挙して執筆しており、また他大学では立派な院生紀要を刊行していた。しかし、このような要求を出すと、教員たちは押し並べて苦渋な表情を浮かべて「難しいなあ」といつもの回答であった。当時の講座は非実験講座であり、決定的に予算不足であった。そのために、筆者が助手時代に初めて科研費に挑戦して、それを基にして、講座の共同研究の成果を報告集として発刊することができた。財源が科研費のために持続的な講座紀要を刊行するには至らなかった。

こんな昔話を書こうと思ったのは、現在の院生は恵まれていると苦言を呈しようとするためではない。力を合わせて、講座紀要のますますの充実を祈る気持ちからである。

2016 年春

教育方法学講座・教授

田中耕治